

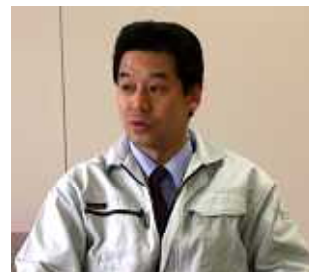
山中ヒアリング2

景観と歴史・文化、伝統産業を生かした 観光政策をすすめる

加賀市山中支所振興課長 荒谷啓1さん

昭和31年 旧山中町と周辺1町3村が合併。以後51年間その状態が続き、平成17年1月に加賀市と合併した。以後3年半経つ。

山中支所では課が3つあるが、振興課が1番大きい。合併後のまちづくりをすすめていくということで、すべての振興ということで振興課となっている。予算的には最初はあったが、毎年、本庁の予算に一本化されていった。



歴史ある観光地 山中温泉

昭和30年代の高度成長時代、温泉地として伸びていった。

初代の町長が観光に力をいれた。町営ロープウェイをつくり、温泉もどんどん掘って観光山中を打ち出した。その中心は1,300年前から続いている総湯「菊の湯」、別棟の女湯。男湯と女湯がこの規模で別々にあるというのは、全国にはなく観光の目玉にしている。

「山中節と山中漆器の山中温泉」で売り出し

人口は旧加賀市で7万人、山中は現在9千5百人。トータルで7万5千人。旧山中町は、面積では旧加賀市より少し広く150km²、95%が山林で、向こうの山とこちらの山が並行しており、そのど真ん中に温泉街が位置している。

川と山に囲まれた細長い温泉地。山中も一時は歓楽志向があったが、資本力の弱さ、地形的に不利で乗り遅れ、鶴仙溪の向こうに出ていくことになり、旅館が中型化していった。

その中で「山中節と山中漆器の山中温泉」で全国的に売り出していった。

漆器では能登が有名だが、山中は年間出荷高が全国一121億円、第2位の輪島が619億円。しかし、輪島は100%が伝統漆器。山中は7割がプラスチック漆器で、これは議論のあるところだ。

情緒ある あやとり橋、ゆげ街道で、若者増える

山中も、過去、客を旅館から出さない仕組みづくりをしていた。昭和の時代でそれも終わり。バブル崩壊で団体客はみこめない、個人、グループ志向、温泉も本物、かけ流し志向の時代になって、本格的に町をかえていこうという動きが生まれた。

新たに観光の目玉ということで平成3年にあやとり橋をつくった。昭和57年に樋口加

奈子のデビュー作で有名になったこおろぎ橋。鶴仙峡のど真ん中に鉄筋の赤い奇抜な色でつくった。これは当時の草月流の勅使河原先生監修で作られた。一番緑の深い所になぜこんな赤い橋か、の声もあったが、若い客が間違いなく増えた。

その後、ゆげ街道がつくられた。

鶴仙溪とゆげ街道が並行して走っている。まだ上流半分の段階であるが。県のモデル事業として、平成15年に完成。それまで袋小路だったが、8号線に入ってきて帰りも8号線になる。「山を眺めながら温泉地に」を旅行業者に宣伝してもらっている。

山中座は、山中節と漆器を紹介している観光の“核”的施設。土日祭日に地元の芸妓さんたちが四季の舞などを見せる。定数700人。合併前の山中の街づくりの区切りとなっている

合併後、山中支所として裁量をもって使える予算は削減されていった。有名温泉を3つかかえて、今までのようにはいかない。予算でも3ではなく2・5とか2になっている。

他の事業分野もおなじだが。合併前に観光協会が反対していたのはそういう理由である。

山中漆器業界は「合併は何ら影響がない」と賛成した。もともと旧加賀市に漆器工業団地が2つあったためである。

ゆげ海道は、真ん中の南町は完成。いま日出町で片側だけの拡幅工事が進行中である。

22年度完成予定である。その完成が合併後初の事業。

3月頃は学生の卒業旅行が多い。1年前だと学生は考えられなかった。今は女性や若いグループが歩いている。うれしい悲鳴。足湯も小さいが、合併前にどこにもあるので「立派でなくてもよい、ないというのがいかん」と作った。毎日誰かが入っている。

最近の大きな変化

去年1月に山中で昭和天皇が泊まった吉野家が再生法適用。風評被害を心配している。山中で吉野家倒産は影響が大きい、そういう時代なのかと住民のショックが大きい。

片山津も昭和50年代161万人の観光客がきたが、現在31万人と5分の1に。山代も60年代の181万人が91万人。山中は、平成のバブル時代に85万人が55万人と減少率は1番小さい。大きな投資ができなかったので大きく崩れなかったのか。しなくてよかったなと思っている。

歩いて回れるまちづくり

片山津も山代も、花火や九谷焼などとの連携事業を進めているが、昼間街を歩いている客は山中が一番多い。ゆげ街道や鶴仙溪を見て、その足で他の温泉に宿泊するケースもある。山中は川床に屋台を出し、お茶を飲んでもらう企画など、旅館からでて町を歩いてもらうためのいろいろな取り組みを進めている。

旅館と商店街がタイアップし、「昼間の山中温泉」で打ち出している。夜は旅館で過ごしてもらう。商店街も夜に客を出してくれとは言わないという協定になっている。「歩いて回

れるまちづくり」、そういう形でやっている。

《荒谷課長との質疑の一部》

観光客が足を運んでいる施設は？

荒谷 お散歩が下の伝統産業会館から出発して41分で一周する。建物に人が入るのは菊の湯で、あとは自然が多い。鶴仙溪、ゆげ街道などである。芭蕉の館はその中にある。

旅館で若い人に泊まってもらう新しい動きは？

荒谷 店主は営業に回る時にパックにしてエージェントを組むが、そぞろ歩きできる、外湯もあるとアピールしている。

それまでだとカニを1人に1杯つけて、売っていた。いまは山中の他の資源をアピールしてきている。こんな橋があって、足湯もある、行ってみようかの若者が多いようだ。

若い人が来ているというが、宿泊客としてきているか？

荒谷 昼間はゆげ街道に来ている。3倍になっているが宿泊数はそれに比例していない。通過点になっている面がある。商店とするとお客が来なければ商売にならない。いまは来ている。それを宿泊させるのは観光協会の努力ですよ、といている。

客層は変わっていないのか？

荒谷 団体客は減っている。最近の傾向、露天ぶろのない旅館が少なくなかったが、いまはニーズも多様化しそれにあわせて、大浴場プラス露天風呂、部屋付き露天風呂などの旅館が増えている。

地元資本で低料金などへの志向は？

荒谷 ほとんどない。先祖代々これでやってきている。地元野菜いれている。県外資本は経費削減で、たとえば、さくらという旅館は滋賀県資本で滋賀県から全部入れていた。地元はまったく潤っていなかった。

我々としては県外資本が入ってくるということは、山中にアピールできるものがあるからだと思っている。ただし彼らはだめだと考えるとあっさり撤退する。山中への愛着がない。地元資本はそうはしない。

地産地消については？

荒谷 もとから地産地消できているし、それが普通である。旧山中町内ではコメなどは地元で、魚は違う。旅館が田んぼを作り自分ところが作った米としているところもある。野菜もすべては山中だけでは賅えないが、旧加賀市の方から入れている。旧加賀市を入れた

地産地消となっている。

お菓子もフジ製菓、第一製菓があり、他観光地の土産物まで作っているほどの土地柄。漆器は手軽な値段が多いので旅館はじめどこでも扱っている。

外人客については？

荒谷 県自体がインバウンドに力を入れているが、英語圏の客は少ない。山中は韓国、台湾客が多い。

小松空港から加賀温泉行きのバスが廃止になった。それだけ需要がないということ。飛行機で加賀温泉に来る人がいない。スーツ着ているビジネスマンばかりで空港降りて金沢に行く。

リゾートマンションがあったが？

荒谷 企業が年間契約していたが、今はやめている。また老人向け施設や賃貸マンションになっているところもある。観光の名所のど真ん中でなぜ老人ホームなのか、イメージが損なわれるとの意見がある。